

# 歌唱教材としてのヒット曲に潜む男女観 —高等学校教科書掲載曲の歌詞傾向

尾崎 祐司\*

(平成25年9月30日受付；平成25年11月5日受理)

## 要 旨

平成元年告示の高等学校学習指導要領から高等学校の芸術科〈音楽〉の教科書にヒット曲が歌唱教材として掲載されるようになった。ヒット曲とはその時代の人々の「魅了と共感」によって成り立つものである。高等学校でそれらを扱う意義は、ヒット曲が高校生を「魅了と共感」へと導く「音楽的価値観」に、知覚・感受する学力を育てる糸口を見いだすことにある。

そこで、高等学校の「音楽Ⅰ」に掲載されているヒット曲の歌詞の文脈を分析したところ、次の点が明らかになった。まず、男女の関係は対等な立場の人称代名詞で描かれていること。次に、男女関係の文脈には3種類あることである。その3種類とは①恋愛の進展を願うもの、②恋愛の回想・別れ、③本音を語る男性像、である。さらに筆者はその文脈には「恋愛」という高校生の憧憬の中に、高校生に平等意識を育む「男女観」が潜ませられていることが分かった。すなわち、高校生への歌唱教材としても「女子差別撤廃条約」<sup>1)</sup>の理念を反映したヒット曲が教科書に掲載されているということである。

## KEY WORDS

High school Art subject “Music” 高等学校芸術科〈音楽〉 Hit songs ヒット曲 Textbook 教科書  
Gender ジェンダー Outlook on man and woman 男女観

## 1 はじめに

高等学校芸術科音楽Ⅰの教科書にメディアを通じてヒットした曲が掲載されるようになったのは、平成元年告示の高等学校学習指導要領（平成6年4月施行）からである。当時は「ヒット曲」とカテゴライズされ、教科書への採用が「話題」として新聞報道されている。この記事の見出しは『メディア「高校教科書柔らか変身」』とされ、「移り気な高校生の心をつかもうと（中略）出版社側も知恵をしぼった」<sup>1)</sup>としている。これ以降、芸術科音楽の教科書に「ヒット曲」が掲載され現在に至っていることは、今さら言うまでもない。

問題の所在は、高校生にそれらの曲を通して何を教えようとしているのか、という教育内容の不明確さにある。しかし、本論での指摘は単に歌詞の表面的な意味をどう感受に至らしめるかという教材論ではない。経済活動と結びついたヒット曲を教材化することは、その歌詞や音響に含まれる人々を「魅了するもの」を無視できない。この「魅了するもの」があるからこそ歌の質的要素を感受することができるのではないか。すなわち、教科書に掲載されているヒット曲には高校生に何らかの「教育的メッセージ」を発してくれる「価値」が存在していると考えられる。本研究では、この「教育的メッセージ」として「男女観」に着目した。教科書ではこの価値観についてあからさまに指導せず、歌詞をとおしてさりげなく指導するという「潜ませた教育内容」となっていると捉え考察することにした。

## 2 ヒット曲の教育的要素

### 2.1 「魅了と共感」から知覚・感受へ

高等学校では平成25年度入学生から学年進行で平成21年3月告示の高等学校学習指導要領（以下、新学習指導要領）が完全実施される。改訂された芸術科〈音楽Ⅰ〉の「A 表現（1）歌唱」では次の4項目が指導事項となった。<sup>2)</sup>

ア 曲想を歌詞の内容や楽曲の背景とかかわらせて感じ取り、イメージをもって歌うこと。

- イ 曲種に応じた発声の特徴を生かし、表現を工夫して歌うこと。
- ウ 様々な表現形態による歌唱の特徴を生かし、表現を工夫して歌うこと。
- エ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して歌うこと。

これらの指導事項について解説では、各事項の文末を「歌うこと」と示し、歌唱という音楽活動を通して学習することを明確にした<sup>(3)</sup>、としている。特にアの事例として、「曲想を、歌詞の言葉の意味やその語感、歌詞が表す情景や心情などとかかわらせて感じ取ったり、その楽曲がつくられた背景や歌い継いできた人々の思いなどとかかわらせて感じ取ったりして、楽曲にふさわしい表現を工夫して歌うことが考えられる。」<sup>(4)</sup>とある。すなわち、背景等を知識として理解するだけではなく、歌詞や曲の雰囲気といった「質」を感じ取り歌唱に反映できるように指導することを示している。

しかし、「教育」として扱われるヒット曲は、この歌を通じて何を教えるかは教科書に明記されておらず、教育現場の教員に託されていると言っても過言ではない。ともすればオリジナルはバンドによる曲にも拘わらず、ピアノ伴奏でベルカントっぽく「歌った」という「実績」を作り、内容は「音程」「リズム」といった音楽の形式的側面<sup>(5)</sup>の指導に終始する、という感が否めない。

すなわち、歌を技能的にどう歌うかという議論も必要かもしれないが、新学習指導要領の「その楽曲がつくられた背景や歌い継いできた人々の思いなどとかかわらせて感じ取ったりして」という指導事項を反映させるには、なぜこの歌を取り上げるのかといった歌の文化的背景を学習に取り入れる必要性が高まってくる、と筆者は考える。

昭和を代表する作詞家の阿久悠はヒットする曲には「さまざまな理由があり、必ずしも優れた作品が大量の支持を集めるとは限らないことも多いのですが、しかし、そうは云っても多くの人を魅了するもの、共感させるものがあつた」<sup>(6)</sup>と述べている。ヒット曲が経済活動としての「商品」と捉えれば、人々に「魅了と共感」をもたらそうとするものであることは容易に理解できる。

このように考えれば、ヒットした曲を「教育」に取り入れることは、高校生を「魅了と共感」へと導く「文化的背景」に知覚・感受する学力を育てる糸口を見いだしているとも言えないだろうか。

## 2.2 「憧憬」の設定による教育的メッセージ

では魅了するものと共感させるものはそもそもどう作られてきたのか。阿久は、「飢餓と憧憬」というテーマで、ある歌が流行した時代には流行するための理由があることを述べている。それは「歌謡曲は“飢餓と憧憬”で成立しているのではないか。(中略) 飢餓、つまり、心の中の飢えているものと、その飢え故にあこがれるものが歌謡曲になっている」<sup>(7)</sup>という詞を書くにあたっての仮説である。すなわち、歌謡曲には流行するための「仕掛け」が必要で、そのためには人々が飢えているものと憧れているものを見極めることが必要であるというのである。この「見極め」に人々が共感できる歌詞であればヒットする、という考え方である。では、高等学校教科書に採用されている「ヒット曲」にはどのような「憧憬」が設定されているのであろうか。授業で取り上げる教材とは、教師がその時間を通じて指導しようとする何らかの「教育的要素」を含んでいる筈である。筆者は、このヒット曲に含まれる「憧憬」に教師がどのような「教育的要素」を潜ませるか、ということに教材化の意義があると捉えている。

先行研究としてこのことについて筆者は、教科書に採用されるヒット曲には何らかの掲載「基準」がある、と設定し実際に掲載された曲の歌詞について分析した。その分析結果は、『肯定的なメッセージで感情の変化を期待できる「人生」や「恋愛」をモチーフにした歌詞』を高校生へ向けた「憧憬」として設定している、というものである。さらに、「基準」として①「人生」をテーマにしたものは現状への満足を促すものではなく、人生には苦労があることや希望を抱かせる内容であること、②「恋愛」をテーマとしたものはお互いを助け合い尊重し合う内容であること、③①②のテーマから肯定的なメッセージで感情の変化を期待できる内容であること、の3点を示している<sup>(8)</sup>。すなわち、この3点に纏わる歌を高校生に歌わせることで芸術科音楽として教育的メッセージを発するという「指導」を行っているのである。

しかし、「歌詞の意味、歌詞が表す情景や心情、歌詞の成立の背景」<sup>(9)</sup>から何を根拠に何を感受させることを目指しているのか先行研究では明確にしていない。そこで本研究では「男女観」に関する歌詞に絞って、どのような「教育的メッセージ」を発しているのか考察することにした。

### 3 ジェンダー・フリー<sup>2)</sup>へ向かう学校教育

#### 3. 1 「潜ませた教育内容」としての男女観

内閣府が平成21年10月に全国20歳以上の者を対象に行った「男女共同参画社会に関する世論調査」<sup>(10)</sup>によると、「男女の地位の平等感」が分野によって異なることが報告されている。例えば、「家庭生活」「職場」「学校教育の場」の3分野で「男性の方が優遇されている」「平等」との回答数はそれぞれ表1、表2のとおりである。

表1 「男性の方が優遇されている」：回答数の割合

	平成4年11月	平成21年10月
家庭生活	56.9%	46.5%
職場	60.1%	62.1%
学校教育の場	15.3%	13.9%

表2 「平等」：回答数の割合

	平成4年11月	平成21年10月
家庭生活	35.2%	43.1%
職場	21.9%	24.4%
学校教育の場	60.6%	68.1%

これらの各回答を比較して顕著なのは、表1、2共に「学校教育の場」と「家庭生活」「職場」との格差が大きいことである。「学校教育の場」の相対的なパーセンテージの高さは、男女別・男子優先名簿に代表されるような見えないセクシズム（性別差別主義）に対する成果といえよう。しかし、「家庭生活」や「職場」では依然として「男性の方が優遇されている」と感じている回答者が「学校教育の場」に比べ、およそ3.3倍、4.4倍と感じ取り方が大きく異なる。

この調査結果から裏付けられることは、「学校教育の場」では「男女共同参画社会」実現への「努力」がなされてきたということである。例えば、かつての中学校国語科の教科書教材で伊藤は「男女とも主人公になるほど職業が描かれ、他方家事を行うシーンは出てこなくなる（中略）脇役となって詳細な描写がなくなるほど女性は家事と結びつけられ、職業から切り離され（男性は家事から切り離され）ステレオタイプの性別役割分業に押し込まれていく傾向がある」<sup>(11)</sup>と指摘している。すなわち、「家庭生活」や「職場」に認識の変化をもたらすために、「学校教育の場」では男女の平等観についての「潜ませた教育内容」によって教育的な「努力」がなされている、ということである。

#### 3. 2 教育課程の変化と教科への反映

では「学校教育の場」における「平等」感の認識はどのように反映されているのであろうか。

男女観が大きく変化の方向へ向かうのは、平成元年告示の学習指導要領からである。その代表的な変化は、家庭科の履修が従前の「すべての女子に履修させるもの」から男子も含めた「すべての生徒に履修させる」<sup>(12)</sup>必修科目になったことである。男子も履修することになった理由として、「家庭を取り巻く社会や環境の変化等に対応し、男女が協力して家庭生活を築いていくことや生活に必要な知識と技術を習得させることなどの観点、また、いわゆる「女子差別撤廃条約」の批准に伴い男女同一の教育課程を制度として確保する必要がある」<sup>(13)</sup>ことがあげられている。

実際、「家庭一般」の教科書においても、『かつての日本の家族は、男性優位の「家」制度によって家族内のあり方が厳しく規制されていた。そこでは結婚は「家」を存続させるための家と家との結びつきであり、個人の意思とは無関係に決められることが多かった。特に女性は、ほとんどの権利も認められておらず、「家」のために生き、他の家族員の犠牲になって生きることを強いられた。しかし、近代的な家族観のもとでは、家族の内部の関係はあくまでも私的なもので、他から規制されることなく、それぞれの家族が個性的な家族関係を育てていくことができる。』<sup>(14)</sup>と「男女観」の変化が教科書にも明記されたのである。

では、芸術科〈音楽〉として「女子差別撤廃条約」の理念はどのように実現されてきたのであろうか。音楽にとって高校生を魅了する男女観は何処に在るのか。旧来の男女観からの変化に「魅了と共感」ということを考えれば、「恋愛」をテーマとした歌詞には当然ヒットした時代の高校生の憧れが反映されている可能性は高いと考えられる。

#### 3. 3 新しい価値観への憧れ

小川は1920年代末から1960年代半ばまでを「歌謡曲の全盛期」とし、歌の歌詞で男女関係がどのように表現されてきたかを考察している。それによると、歌謡曲の時代には「日本＝歌謡曲＝見合い結婚・色恋」対「欧米＝洋楽＝恋愛結婚」という対立図式があったことを指摘している。そして、洋楽が浸透しポスト歌謡曲への移行期には「若者＝ポップス・フォーク・ロック＝恋愛結婚」対「中高年層＝演歌＝見合い結婚・色恋」といった対立図式になる<sup>(15)</sup>、と指摘している。すなわち、「若者」の歌の歌詞で扱われる「男女観」は、「中高年層」の価値観とは異なる「恋愛結婚」がモチーフになっているという指摘である。歌の歌詞に恋愛や結婚がモチーフとされるのは最近のことではな

い。森永の調査によれば「流行歌における恋愛の歌の比率は、明治時代には7%にすぎなかった。しかし、1990年代になると、その数字は97%にも達している」<sup>(16)</sup>、と流行歌に「恋愛」の需要が高いことを報告している。このように、森永の調査と小川の考察は、歌には「恋愛」のニーズが高く、それにまつわる価値観が反映されていることを裏付けている。また、小川の提唱する対立構図からは、法的に女性への差別が禁止されたとしても、世代によって共感できる男女観が簡単に変化しないことも読み取れる。であるからこそ、歌には「恋愛」や「結婚」をはじめとした新しい「男女観」を人々に「魅了と共感」として提供する力があると言える。

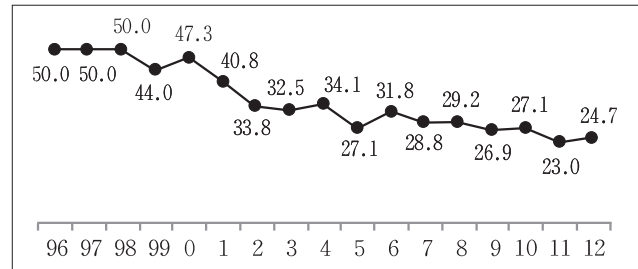
### 3.4 「恋愛」から「結婚」への「飢餓と憧憬」

前項の1990年代以降の「流行歌における恋愛の歌の比率」の高さは、現実の「恋愛」「結婚」意識と因果関係があるのであろうか。

某結婚情報サービス会社が未婚の新成人に実施した意識調査の「2012新成人の恋愛意識」<sup>(17)</sup>の結果によると、交際相手について「いる」の回答率が1996年は50%であったのに対し、2012年では24.7%と半減している。

(表3)<sup>(18)</sup>

表3 「交際相手がいる」：回答率の変遷



一方、「交際相手がほしい」という回答は、2000年の90%に対し、2012年は68.3%で半減までは落ち込んでいない。しかし、「結婚の意向あり」という回答は1996年の84.5%に対して2012年は80.5%と大差はない。<sup>(19)</sup>

この調査結果からは、2012年の成人は1996年の成人ほど実際の恋愛に結びついてはいないが、結婚への願望は強いことが分かる。したがって、「流行歌における恋愛の歌の比率」の高さは新成人の「恋愛」や「結婚」といった願望にも裏付けられていることが理解できる。すなわち、「恋愛」といった結婚への「過程」をどのように歩めばよいのか、この点に「恋愛」と「結婚」が高校を卒業して間もない現代の新成人が抱く「飢餓と憧憬」があると言える。

### 3.5 歌唱教材の方向性

ここまでで、ヒット曲を教材化するにあたっての「文化的・歴史的背景」<sup>(20)</sup>を概観してきた。これらを踏まえると自分の将来像を描こうと希望を抱く高校生に、どのような「男女観」を描いた歌が「憧憬」として設定され教科書に反映されているのか、という疑問が湧く。

「女子差別撤廃条約」の批准に伴いヒット曲の教材化にも、必ず「ジェンダー・フリー」というフィルターがかかるといっても過言ではない。すなわち、歌詞の文脈がジェンダー・フリーであるかどうか、が教科書掲載にあたっての「フィルター」ということになる。選曲する大人が「教育的に許容でき、かつ高校生が共感できる「男女観」が歌詞に潜んでいるか、ということがヒット曲の教材への方向性だと考えられる。したがって、いくら「魅了と共感」が仕組まれた「恋愛」や「結婚」を描いた歌詞のヒット曲であっても、「女子差別撤廃条約」の理念に基づいていない限り、教材にはなりえないということである。それが「ヒット曲に潜む男女観」という見えない「教育的メッセージ」だと筆者は捉えている。

## 4 研究の方法

### 4.1 「概念的カテゴリ」<sup>(21)</sup>の生成

次にここまで概観した「文化的・歴史的背景」と問題の所在に基づいて、教科書掲載曲の歌詞について分析及び考察する。分析の観点には、歌詞の文脈にある「男性」と「女性」の扱われ方である。男性が女性をどのような立場で描かれているか、反対に女性から男性をどう見ようとしているか、といった教育的「吟味」の形跡である。これらの分析から歌詞の傾向について概念のグループ、すなわち「概念的カテゴリ」を生成し、潜ませている「教育的メッセージ」の存在を明らかにする。

### 4.2 分析の対象曲

平成元年告示高等学校学習指導要領から新学習指導要領までに掲載されたヒット曲〈表4〉のうち、今回入手できた選択必修科目の「音楽I」の教科書の全掲載曲を対象にする。

〈表4〉で下線のある曲目は、歌詞に男性と女性の二者が登場するものである。二者に関する文脈から、高校生にどのような「男女観」を養おうとしているのか考察する。

表4 教科書掲載ヒット曲一覧

曲目	検定年・教科書番号			
<u>この広い野原いっぱい</u>	H5 [27教芸 音 I 503]	H5 [89友社 音 I 506]	H9 [27教芸 音 I 519]	
翼をください	H5 [27教芸 音 I 503] H9 [89友社 音 I 521] H18 [27教芸 音 I 010] H24 [27教芸 音 I 304]	H5 [89友社 音 I 505] H14 [27教芸 音 I 004] H18 [89友社 音 I 011] H24 [89友社 音 I 305]	H5 [89友社 音 I 506] H14 [89友社 音 I 005] H18 [89友社 音 I 012]	H9 [27教芸 音 I 519] H14 [89友社 音 I 006] H24 [27教芸 音 I 303]
乾杯	H5 [89友社 音 I 505]	H5 [89友社 音 I 506]		
少年時代	H5 [27教芸 音 I 503] H9 [27教芸 音 I 519] H14 [27教芸 音 I 004] H24 [27教芸 音 I 303]	H5 [89友社 音 I 506] H9 [27教芸 音 I 520] H14 [89友社 音 I 005] H24 [89友社 音 I 305]	H9 [17教出 音 I 517] H9 [89友社 音 I 521] H18 [27教芸 音 I 010]	H9 [17教出 音 I 518] H9 [89友社 音 I 522] H18 [89友社 音 I 011]
贈る言葉	H5 [89友社 音 I 506]			
どんなときも	H5 [89友社 音 I 506]			
<u>思い出がいっぱい</u>	H5 [89友社 音 I 506]			
あのすばらしい愛をもう一度	H5 [27教芸 音 I 503]	H5 [89友社 音 I 506]		
夢をあきらめないで	H5 [27教芸 音 I 503]	H5 [89友社 音 I 506]	H9 [89友社 音 I 522]	
いい日旅立ち	H5 [27教芸 音 I 503]			
愛は勝つ	H5 [89友社 音 I 505]			
<u>LOVE LOVE LOVE</u>	H9 [27教芸 音 I 520]	H9 [89友社 音 I 521]	H9 [89友社 音 I 522]	
上を向いて歩こう	H9 [17教出 音 I 518] H18 [89友社 音 I 011]	H9 [89友社 音 I 522] H24 [27教芸 音 I 304]	H14 [27教芸 音 I 004]	H14 [89友社 音 I 005]
忘れられたBig Wave	H9 [17教出 音 I 517]			
夢の中へ	H9 [17教出 音 I 518]			
<u>赤いスイートピー</u>	H9 [17教出 音 I 518]			
<u>未来予想図Ⅱ</u>	H9 [17教出 音 I 518]			
卒業写真	H9 [27教芸 音 I 519]			
<u>瞳がほほえむから</u>	H9 [27教芸 音 I 520]			
<u>12月の雨</u>	H9 [27教芸 音 I 520]			
<u>True Love</u>	H9 [27教芸 音 I 520]			
Big Tree	H9 [27教芸 音 I 520]			
時代	H9 [89友社 音 I 522]			
<u>TSUNAMI</u>	H14 [27教芸 音 I 004]			
きっと ー光のありかー	H14 [27教芸 音 I 004]			
晩夏 (ひとりの季節)	H14 [27教芸 音 I 004]			
花～すべての人に心の花を～	H14 [89友社 音 I 005]			
未来へ	H14 [27教芸 音 I 004]	H14 [89友社 音 I 006]	H18 [89友社 音 I 012]	
夜空のムコウ	H14 [89友社 音 I 006]			
世界に一つだけの花	H18 [89友社 音 I 011]	H18 [89友社 音 I 012]	H24 [27教芸 音 I 304]	
涙そうそう	H18 [27教芸 音 I 010]	H18 [89友社 音 I 012]		
川の流れのように	H18 [27教芸 音 I 010]			
あなたに逢いたくて	H18 [27教芸 音 I 010]			
<u>「いちご白書」をもう一度</u>	H18 [27教芸 音 I 010]			
<u>見上げてごらん夜の星を</u>	H18 [27教芸 音 I 010]	H24 [27教芸 音 I 303]	H24 [89友社 音 I 305]	
<u>風になりたい</u>	H9 [17教出 音 I 518]	H18 [27教芸 音 I 010]	H24 [89友社 音 I 305]	
<u>ありがとう</u>	H24 [27教芸 音 I 303]			
青い山脈	H24 [27教芸 音 I 303]			
青い珊瑚礁	H24 [27教芸 音 I 303]			

なごり雪	H24 [27教芸 音 I 303]
負けないで	H24 [27教芸 音 I 304]
帰る場所	H24 [89友社 音 I 305]
心の瞳	H24 [89友社 音 I 305]

## 5 分析

### 5.1 対等な立場の人称代名詞

教科書掲載曲を概観すると、歌詞に男女二人の登場人物があるものが43曲中19曲（44.1%）ある。曲目リストの検定年を確認すると、平成9年以降の教科書に掲載されている曲には35曲中17曲（48.5%）に男女を表す名称が登場している。

着目すべきは、人称代名詞である。女性の立場から使われている二人称は「あなた」と一人称の「わたし」、男性からは「きみ」と「ほく」であり、「おれ」と「おまえ」といった男性優位的なものはない。歌詞の文脈からも対等な立場での男女観であることが分かる。また、複数形を表す言葉は「ふたり」「ほくら」である。

具体的に使用されている曲目と人称代名詞は表5のとおりである。

表5 人称を表す名称

人称代名詞	曲 目
「あなた」と「わたし」	この広い野原いっぱい 未来予想図Ⅱ 瞳がほほえむから あなたに逢いたくて ありがとう 青い珊瑚礁
「きみ」と「ほく」	True Love 「いちご白書」をもう一度 なごり雪 帰る場所
「あなた」のみ	赤いスイートピー 12月の雨 風になりたい
「きみ」のみ	思い出がいっぱい 心の瞳
「ほく」のみ	TSUNAMI
「ほくら」	見上げてごらん夜の星を
「ふたり」	Love Love Love 未来予想図Ⅱ あなたに逢いたくて 「いちご白書」をもう一度 見上げてごらん夜の星を 青い珊瑚礁

### 5.2 男女関係の文脈

では前項の男女はどのような文脈で使われているのであろうか。筆者は〈表5〉の曲目を3つの概念的カテゴリに分類した。その3つとは、①恋愛の進展を願うもの、②恋愛の回想・別れ、③本音を語る男性像、である。

#### 5.2.1 ①恋愛の進展を願うもの

女性が主人公のものからは次の様な事例がある。

##### 【赤いスイートピー】

「あなたに／ついてゆきたい」

「あなたとおなじ／せいしゅん／はしってゆきたいの」

##### 【瞳がほほえむから】

「あなただけを／みつめている」

「あなただけが／わたしを／さがしていた」

##### 【ありがとう】

「“あなたのゆめ”が／いつからか／“ふたりのゆめ”に／かわっていた」

「よろこびも／かなしみも／わかちあえるように」

また、男性が主人公のものからは次の様な事例がある。

##### 【True Love】

「きみだけを／しんじて」

「ほくらは／いつも／はるか／はるか／とおいみらいを／ゆめみていたはずさ」

## 【見上げてごらん夜の星を】

「てをつなごう／ほくと／おいかけよう／ゆめを」

「ふたりなら／くるしくなんかないさ」

女性と男性との異なる主人公を比べると、【赤いスイートピー】のように女性が男性に「ついてゆきたい」という遜った表現はあっても、男性から「ついてこい」という男性優位を抱かせるような表記はない。【赤いスイートピー】は1981年のヒット曲であることを考えると、当時の松田聖子の熱烈なファンを始め男性が望む若い女性像だったのかもしれない。しかし、曲の掲載も平成9年の検定時のみであることから、現在の「男女観」には「そぐわない」と判断されたのかもしれない。

一方、同じ女性が主人公であっても2010年にヒットし、今回の教科書改訂で掲載された【ありがとう】は、“あなたのゆめ”が“ふたりのゆめ”になり、喜びや悲しみを「分かち合う」関係になっている。このような「分かち合う」男女観は、【見上げてごらん夜の星を】にも「ふたりなら／くるしくなんかないさ」と描かれている。1960年というおよそ50年前の作品にも拘わらず掲載され続けているということは、対等な対場での表現が今日の男女観に適應できていると判断されたと考えられる。

## 5.2.2 ②恋愛の回想・別れ

また、同じ恋愛であっても、回想や別れの場面を描写している歌もある。次の様な事例がある。

## 〈回想〉

## 【卒業写真】

「かわってゆく／わたしを／あなたは／ときどき／とおくでしかって」

「あなたは／わたしの／せいしゅんそのもの」

## 【あなたに逢いたくて】

「ふたりの／へやの／とびらを／しめて／おもいでたちに／さよならを／つげた」

「あなただけ／みつめてた／あいてた／わたしの／すべてを／かけて」

## 【「いちご白書」をもう一度】

「いつか／きみと／いった／えいが」

「ふたりで／でかけた」

「ふたりだけの／メモリー／どこかで／もういちど」

## 〈別れ〉

## 【帰る場所】

「あしたが／きちゃえば／しばらく／あえないけど／いつまでも／きみのことを／わすれないよ」

「さよなら／また／あえるから」

## 【なごり雪】

「きみの／よこで／ほくは／とけいを／きにしてる」

「きみの／くちびるが／さようならと／うごくことが」

これら過去について〈回想〉している歌詞、すなわちノスタルジックな思いにふけっている内容は、なぜヒットしてきたのであろうか。この「ノスタルジー」について、見崎は次のように説明している。

ノスタルジーの機能は、アイデンティティの断絶への不安を癒すことにある。青年期から成人期への移行期は、ライフ・サイクルの中で最も非連続的な時期にあたるが、そのとき自己は、アイデンティティの連続性を確保しようとする。(中略)アイデンティティの連続性を確保しようとするノスタルジーの機能は、ライフ・サイクルにおける転機のような人生上の大きな節目にはたらくだけでなく、もっとスケールの小さい生活上の非連続にまで一般化できると思われる。例えば失恋である。恋愛中の幸福な時期と、別れてからの憂鬱な時期には気持ちの激しい断絶がある。この断絶がアイデンティティの連続性をおびやかしようとするとき、ノスタルジーがはたらくのである。<sup>(22)</sup>

見崎のいう「断絶」は〈別れ〉を題材にした歌においても同様であろう。継続していた恋愛が、進学や就職といった転機によって継続が難しくなる現実を受け入れざるを得ない胸中を吐露している文脈である。

このように恋愛による気持ちの激しい断絶は、特定の高校生だけにあるものではない。そのため、「青年期から成人期への移行期」の男女が共感できるノスタルジーの男女観であることが分かる。

### 5.2.3 ③本音を語る男性像

3つ目のカテゴリは「平等」になった男女観で男性が男性をどう描いているか、ということである。すなわち、「男は強く、女は弱く」といったステレオタイプではない男性像を高校生に提示する必要があるためである。その事例として、【TSUNAMI】を取り上げる。

#### 【TSUNAMI】

「かぜに／とまどう／よわきな／ほく」  
 「ほんとうは／みためいじょう／なみだもろい／かこがある」  
 「ほんとうは／みためいじょう／うたれづよい／ほくがいる」  
 「あんなに／すきなひとに／であう／なつは／にどとない」  
 「ひとは／だれも／あい／もとめて」

この文脈では「ほんとうは」と男性「ほく」が見た目とは違って「なみだもろい」自分と「うたれづよい」自分との両面があることを告白しているのである。この告白について難波江は、『常に「男＝強者」であることを期待されてきた演歌の男の主人公にはとても口にするのできるものではない』<sup>(23)</sup>と分析している。

この告白する男性像は、恋愛について悩むことは男性も同じで、好きな人と語り合いたいという思いもある。女性から見た外観（男性像）と内面は違っており、男性も女性に本音を聞いてもらい喜びや悲しみを分かち合いたいのだ、という男性と女性の両者へのメッセージが含まれている。すなわち、かつての男性像とは異なり、「男性も本音を語っていいのだ」という新たな男女観への方向付けが潜んでいると言える。

## 6 まとめ

教科書に掲載されているヒット曲の歌詞はジェンダー・フリーによるもので、かつ「恋愛」という高校生の憧憬の中に平等意識を育む「男女観」を潜ませていることが明らかになった。すなわち、高校生に恋愛を綴った歌詞を読みこませることで、「女子差別撤廃条約」を反映させた「男女観」について歌をとおして指導している、ということである。

今回の研究では「恋愛」を中心に「男女観」を考察したが、分析を進めるにつれ新たな疑問が湧いてきた。歌とは歌詞の文脈をより深く感受へと導くために、抑揚が音楽へと発展し人々の心情により強く訴えかけるものである。一方、1978年頃から「異質なアンビエンスの侵入を許し始めるように感じられる」<sup>(24)</sup>という様に、「歌」と「演奏」がはっきりと分離していない、もしくは1984年頃からの「人声を“歌”ではなく、バンドアンサンブルを構成する“ヴォーカル”として捉える、というように「歌とその伴奏」ではないサウンド・テクスチュア<sup>(25)</sup>がヒット曲の一翼を担っている。このような様相から考察すると、高等学校の教科書で扱われるヒット曲は歌詞の文脈を理解させることが優先で、作曲者がこだわるであろう伴奏楽器やサウンドの音色観、およびバランスといった音響的な問題はさほど大きな問題ではないようである。

そもそも、ヒット曲の教材化は冒頭で紹介した新聞報道のように、「高校生の心をつかめる」という必要悪で教材化するニュアンスによって始まったのかもしれない。その高校生の価値観への「接近」は何が有効であったのかは不鮮明であるが、ヒット曲の教材としての教育的価値は日々変化している筈である。このように考えれば、「言語活動の充実」「音楽文化について理解を深める」<sup>(26)</sup>といった新学習指導要領の改訂内容は、発声という行為がありさえすれば感受する力がどう養われるかは生徒に託される、という従来の音楽学習過程から改善されなければならないことを重視していることが分かる。そのためには高校生に歌詞として書き出された日本語を表面的に理解させるのではなく、なぜそのような歌詞が当時ヒットしたのかについて高校生自らが考えて発言できる場面を設定することが必要になるのではなかろうか。例えば、今回取り上げた「女子差別撤廃条約」といった時代背景の世界で生きているからこそ、歌詞の「男女観」について「魅了と共感」が生まれ感受することができる。このような「文化的・歴史的背景」の事実のもとに作られた歌詞であることを高校生が知覚する場面が必要なのである。そうすることで、歌詞の登場人物の胸中をどう歌うべきか深められる、という学習展開を期待したい。



## 注

- 1) 正式名称は「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」。男女の完全な平等の達成に貢献することを目的として、女子に対するあらゆる差別を撤廃することを基本理念としている。具体的には、「女子に対する差別」を定義し、締約国に対し、政治的及び公的活動、並びに経済的及び社会的活動における差別の撤廃のために適当な措置をとることを求めている。本条約は、1979年の第34回国連総会において採択され、1981年に発効した。日本は1985年に締結した。  
外務省HP：http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/josi/（2013.9.3閲覧）
- 2) 学校文化の中に性別によって異なった処遇をする「ゆがみ」をなくして、性別に関わりなく子どもたちを平等に扱う状態を指す。木村涼子（1999）『学校文化とジェンダー』勁草書房、p.67

## 引用文献

- (1) 朝日新聞朝刊（1993.7.1）『高校教科書柔らか変身（メディア）』p.29
- (2) 文部科学省（2009a）『高等学校学習指導要領 平成21年3月告示』p.98
- (3) 文部科学省（2009b）『高等学校学習指導要領解説 芸術（音楽 美術 工芸 書道）編 音楽編 美術編』教育出版、p.12
- (4) 文部科学省（2009b）、前掲書、p.13
- (5) 西園芳信（2006）「カリキュラム構成を支える哲学」日本学校音楽教育実践学会編『生成を原理とする21世紀カリキュラム』東京書籍、p.13
- (6) 阿久悠（1999）『歌謡曲って何だろう』日本放送出版協会、pp.7-8
- (7) 阿久悠（1999）、前掲書、p.60
- (8) 拙論（2013）「高等学校の音楽学習におけるJ-POPでの「教育内容」について」『上越教育大学研究紀要第32巻』上越教育大学、pp.370-371
- (9) 文部科学省（2009b）、前掲書、p.13
- (10) 「教育アンケート調査年鑑」編集委員会（2010）『教育アンケート調査年鑑 2010年版上』創育社、pp.558-566
- (11) 伊藤良徳、大脇雅子、紙子達子、吉岡睦子（1991）『教科書の中の男女差別』明石書店、p.136
- (12) 文部省（1989a）『高等学校学習指導要領（平成元年3月）』大蔵省印刷局、p.5
- (13) 文部省（1989b）『高等学校学習指導要領解説 総則編（平成元年12月）』東山書房、p.94
- (14) 樋口恵子（1994）『新家庭一般』一橋出版（文部省検定済教科書[112 一橋 家庭518]）、p.3
- (15) 小川博司（1999）「歌謡曲の中の男と女」北川純子編『鳴り響く〈性〉日本のポピュラー音楽とジェンダー』勁草書房、pp.211-232
- (16) 森永卓郎（1997）『〈非婚〉のすすめ』講談社現代新書、p.80
- (17) 「教育アンケート調査年鑑」編集委員会（2012）『教育アンケート調査年鑑 2012年版上』創育社、pp.558-566
- (18) 「教育アンケート調査年鑑」編集委員会（2012）、前掲書、p.563
- (19) 「教育アンケート調査年鑑」編集委員会（2012）、前掲書、p.563
- (20) 文部科学省（2009b）、前掲書、p.12
- (21) Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967) *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. New York: Aldine de Gruyter, p.23
- (22) 見崎 鉄（2002）『Jポップの日本語—歌詞論』彩流社、p.214
- (23) 難波江和英（2004）『恋するJポップ 平成における恋愛のディスコール』冬弓舎、pp.72-73
- (24) 増田聡（2006）『聴衆をつくる—音楽批評の解体文法』青土社、p.98
- (25) 増田聡（2006）、前掲書、p.99
- (26) 文部科学省（2009b）、前掲書、p.12

## 【教科書】（出版社番号順）

- 『音楽I 改訂版』（教育出版）[平成9年2月28日検定済：17教出 音I517]  
 『高校音楽I 改訂版』（教育出版）[平成9年2月28日検定済：17教出 音I518]  
 『高校生の音楽1』（教育芸術社）[平成5年2月28日検定済：27教芸 音I503]  
 『Mousal』（教育芸術社）[平成9年2月28日検定済：27教芸 音I520]  
 『Mousal』（教育芸術社）[平成14年3月10日検定済：27教芸 音I004]  
 『Mousal』（教育芸術社）[平成18年3月9日検定済：27教芸 音I010]  
 『Mousal』（教育芸術社）[平成24年3月5日検定済：27教芸 音I303]  
 『新編 高校の音楽=1』音楽之友社 [平成5年2月28日検定済：89友社 音I505]

- 『新編 高校生の音楽= 1』音楽之友社 [平成5年2月28日検定済：89友社 音I 506]  
『最新 高校の音楽1』(音楽之友社) [平成9年2月28日検定済：89友社 音I 521]  
『最新 高校生の音楽1』(音楽之友社) [平成9年2月28日検定済：89友社 音I 522]  
『新 高校生の音楽1』(音楽之友社) [平成14年3月10日検定済：89友社 音I 005]  
『新 高校の音楽1』(音楽之友社) [平成14年3月10日検定済：89友社 音I 006]  
『高校生の音楽1 改訂新版』(音楽之友社) [平成18年3月9日検定済：89友社 音I 011]  
『高校の音楽1 改訂新版』(音楽之友社) [平成18年3月9日検定済：89友社 音I 012]  
『高校生の音楽1』(音楽之友社) [平成24年3月5日検定済：89友社 音I 305]

# Outlook on man and woman hiding behind in hit songs as teaching materials

: Text tendency of high school textbooks publication songs

Yūji OZAKI\*

## ABSTRACT

Hit songs came to be placed in the textbook of art subject <music> of the high school as the song teaching materials by a high school course of study of the notification in 1989. The significance to treat them in a high school is to find a beginning to bring up "perception, reception" scholastic ability to do in "the musical sense of values" that a hit song leads a high school student to "charm and the sympathy".

Therefore as a result of having analyzed the context of text of hit songs placed in textbooks of "music I" of the high school, the next point became clear. Three kinds are "things in hope of progress of the love", "Recollection, parting of the love", "The image which talks about the true intention for men". Furthermore, the writer understood that "outlook on man and woman" was made to hide behind in that I brought up equality awareness to a high school student in the admiration of the high school student called "the love" for the context. In other words, it means that hit songs that reflected an idea of "the Convention on the Elimination of All Forms of Discrimination against Women" as songs teaching materials of high school students are placed in music textbooks.

---

\* Music, Fine Arts and Physical Education